

人間形成の七高時代

18 理甲 福井 崇時

1. 七高を受験するまで

中学は大阪府立住吉中学校、大阪市阿倍野区北畠、天王寺阿倍野から住吉大社へ行く阪堺電車上町線北畠駅の直ぐ西に在る。東六百米に国立大阪高等学校、西三百米に阿倍野神社、南一キロ米に手塚山古墳、手塚山学院、大阪府立女子専門学校が在る。

昭和十一年四月に入学した。四クラス二百三十名、十五期生。

四年修了で小手試しに大阪商科大学予科を受験。不得意の文系だったから見事に不合格。それから、受験勉強を始めた。

英語は下地ができていた。二年生の英語は益井重夫先生。返答を間違えたり勉強の態度が悪いと、先生は出席簿の分厚い紙板の縦の方で頭とか肩をこつんと叩かれた。先生の勧めで、住中の近くに住まって居られる米国人牧師で大阪商大教授の元へ土曜日午後、英語の勉強に阿部統君と通った。その方の子供さんと一緒に幼児向けキリスト教絵本を読まされ、賛美歌を歌った。中学の英語と米国の子供が読む英語との差を知り英語の習得は大変なことだと覚悟した。単語を覚えることが第一と言われ、やさしく色々なことを話された。小指が曲がった手を見せて、アメリカの学校ではフットボールをするのが普通、その時の怪我ですと。賛美歌の英語は易しいのでいくつかを覚えた。英語の習得に違和感が無くなった。益井先生は翌年広島文理科大学へ移られた。

代数と幾何は問題集を専ら解いていた。ある瞬間、パーッと目の前が明るくなりなんでも来いと自信が湧いた。それからは、試験では解答時間に余裕ができ回り道の解き方をして先生を困らせた。

国語、古文は一番苦手。漢文は先ず先ず。

理科物理の最後の仕上げの時間に、担当の木原市郎先生はサイフォンの原理を説明され、これは難しいから多分入試には出ないだろうとおっしゃった。

受験校を決めるにあたり、親友の紙野伸二君と話し合った。大阪から最も遠い高校へ行こう、北は弘前、南は七高、弘前は寒そうだから鹿児島にしようとした。紙野伸二君とは気が合い、行動を共にしていた。三年生の時から天皇御陵の朱印を集め歩いていた。

紙野君の父上は宮崎、小林のご出身だと知った。屋号紙庄木材という材木商。彼の家が材木商だとは知っていた。七高受験に賛成したのは当然だった。大阪から遠くの高校へと願ったのは小生独りの意思だったかも知れぬ。

2. 鹿児島へ

鹿児島へは紙野君と二人で行った。私の母が大阪駅まで見送りに来た。下関駅から連絡船で門司駅へ渡った。下関駅、門司駅構内の通路に警察官か特高とおぼしき私服がずらりと並んで乗客の動きを睨んでいた。

紙野ご両親のお手配で宿が案配されていた。場所は鹿児島駅の西、駅には夜に着いたので西も東もわからないまま、紙野君について宿となる下宿屋（春日町）へ向かった。翌朝、二階の寝室のカーテンを開け東を見て驚いた。巨大な桜島が朝日に輝く湾の向うに聳えているのではないか。初めて見る桜島の勇姿に感激した。七高へは市電で行った。藩の城址は概ね陸軍が占拠していたが、鹿児島と金沢は別格だった。堀といい石垣といい、この七高へは是非入学したいとの想いで石橋を渡り

受験会場の下見に向かった。

試験会場は大きな部屋だった。試験の個々は覚えていない。英語はかなり難しかったが八、九割の出来。数学は全問正解と自信。理科物理でサイフォンの原理を問う問題が出た。しめたと思った。先に書いたように中学で木原先生が入試には出ないだろうが説明しておくで解答を教えて下さったのを覚えていた。歴史か地理の問題で南沙諸島と解答する問題が出た。これも中学で教えてもらっていた。不合格になるとは全く考えもしなかった。

無事一次は合格。二次試験は口頭試問と体格検査。順番待ちをして午前の最後の二人となった。その一人が山田正興君だった。雑談をした。彼は三重県四日市湯の山の出身でお父上は医者だと言っていた。入学後判ったのは、彼は医学志望の理乙、同じ西寮に入り、部活も山岳部、大阪帝国大学へ進み、親しく付き合う親友となる。

3. 口頭試問

口頭試問は三人の先生、中央の先生が質問された。入学後判ったのだが後藤弘毅先生だった。「君はなぜ七高を受験しましたか」と問われた。先に書いたように兎に角親元から最も遠い高校ということだけで七高と決めたのだから返答に困った。答えにならぬことをしどろもどろに言った。先生は怪訝な顔をされたが、次の質問をされ「泰の首相は誰ですか」、「はい、ピブンです」、後はよく覚えていないが「よろしい、次へ行きなさい」と放免。その時、メモのような紙片を一人の事務員とおぼしき人に渡され、私が行くより先に小走りに第二の口頭試問の先生、岡田恒輔館長（机にお名前前の名札があった）へ渡された。

岡田先生は開口一番「君が七高を受験した目的は」と。ハタと気が付いた。そして、瞬間に脳が活動し「ハイ、鹿児島は西郷隆盛のお国です、西郷さんを慕い西郷さんの教えを勉強するのが一つの目的です」というようなことを答えた。先生は私の顔をじーと見て、少し間をおかれ身体検査場へ行くように言われた。

その時、また先の事務の人が紙片を身体検査をされる先生へ渡された。検査は形式的だった。二次試験の全てが終わったと告げられた。

二日後の三月二十八日は関西学院予科の入試。急ぎ鹿児島駅へ行けば門司行きの列車に間に合う時間だった。午後の口頭試問を待っている紙野伸二君に合否の結果を電報で知らせよう先の下宿屋の方に依頼することを頼み、鹿児島駅へ向かった。下関駅ホームで夜行特急「サクラ」の特急券を購入。列車は空いていた。そして順調に走っていた。

ところが、夜が明ける姫路駅近くからノロノロ運転。変だなと思っていると、姫路駅で停まってしまった。車掌の説明では淀川の西で大きな事故があり神戸から先は不通、特急「サクラ」は神戸で打ち切り、神戸から阪神か阪急電車で大阪へ行き東京行きに乗ってほしいとのこと。

昭和十六年三月二十七日早朝のことだった。

神戸三宮の山手、加納町山手通りに伯母の家があるので先ず伯母の家で朝ご飯を頂きしばらく様子を見ようと伯母の家へ行った。

| 東海道線の大事故

| 二十七日の新聞によると事故は大変なものだった。三月二十六日午後九時五十一分東海道
| 線塚本駅西方の西淀川区加島町の北方貨物連絡線との分岐点で旅客列車と貨物列車と省線
| 電車との二重衝突で百四十名死傷し、東海道線は上下四線とも不通。事故は上下四線の最
| 南端外側下り線を米原発姫路行き下り貨物列車が待避安全側線ポイントが開いていなかった
| たため機関車等が脱線し本線上に転覆した。さらに大阪から来た浜松発姫路行き旅客列車

が横倒しになっている貨物列車に乗り上げ、機関車、手荷物車、客車二輛が転覆した。そこへ西方より進行してきた神戸発京都行き上り省線電車が前記衝突脱線している所へ突っ込み折り重なって脱線。現場は暗夜で小雨の中、阿鼻叫喚の巷と化したと報じていた。汽車や電車は鉄道省が運営。東京、大阪等の都市や東海道、山陽など幹線には電化が進んでいた。電車は省線電車（省電）と呼ばれていた。

4. 合格した

阪急電車で夕刻前に大阪の家へ戻った。夕食を食べている時、合格の電報が来た。紙野君も合格した。理科甲類だと父に告げると薬学出身の父は医学へ進む乙類ではないのかと不満であった。

翌日、住中へ行き先生方に合格の挨拶をして回った。住吉中学校から第七高等学校造士館に進んだ初めての二人である。住中現役からは大阪高校へ毎年四十名近くが入るし、三高、四高、六高、高知へも数名入るが九州へは行かなかった。熊本ご出身で担任だった英語の武田三夫先生は五高へ行って欲しかったと言われた。

5. 七高生となる

当時は大阪の南海電車と国鉄とは連携していて、小荷物は国鉄切符にて下車駅まで無料で送ることができた。寝具は蒲団袋に、日用雑貨は柳行李に入れ、南海電車の天下茶屋駅へ運び鹿児島駅まで送った。

入学式には兄が出席した。兄は九才年上で既に大阪府庁の役人になっていた。鹿児島県庁への公用をつくり官費旅行だった。三人は宮崎の小林にある紙野君の実家に一泊、歓待された。翌日鹿児島の春日町の下宿屋に三人が入った。入学式のことなどは忘れてしまっている。理科甲類一組に割当られ、寮は西寮だった。天文部と山岳部に入部を申し込んだ。

大阪の家からの送金についても紙野家の世話で銀行を紹介され、鹿児島市内の店に口座が作られた。

紙野君の父上が懇意にしておられた第十五銀行支店長が鹿児島出身だったので下宿屋や銀行を紹介してもらった。

6. 後藤弘毅先生に諭される

クラスの組長は田中幸一君、副組長手塚太郎君だった。名簿で名前の順序は入試成績順だと判断できた。小生の名前が予想もしなかった上位にある。住中では中間、期末で頑張っても中位より上になれなかった。それがクラスの上位でびっくりした。

最初の授業が何の科目だったか記憶はないが、後藤先生の第一声「今年の学生で都会から来た者はサカシイ、口頭試問で初めの返答はもたもたしていたが、館長の質問ではまともに答えている」と小生を見ながらおっしゃった。クラスの者は誰も小生がそのサカシイ者だとは気付く筈もない。小生は恥ずかしさで小さくなって先生を見上げていた。中学では生徒個人の行為には殆ど干渉されなかった。だが、今回のように高校では学生個人が人間として拙い行為をすれば直接的忠告の対応をされ人格形成への道を示されるのだと自覚し、以後の高校生活への期待と先生のお諭しを肝に銘じると心に誓った。

7. 寮生活

寮の生活は全てが初めて。予備知識が全く無かったので戸惑うことばかり。ストームなるもの、色々な行事、寮歌、寮対抗試合への応援などなど。時に応じて寮総務ら先輩からどんどんと生活設計への

行動指針を示され精神的な薫陶を受けた。ある先輩は「主観の英雄、客観の馬鹿」と常に言っておられた。

西寮の逍遙歌「もりの梢の（ふるさと）」の作詞は中村正常先輩（大正十一年文乙）で、当時子役で有名だった中村メイ子の父親だと教えられた。北は北大予科から南の五高までの寮歌も習った。

寮では全員が順番に一冊のノートに日記をつける務めがあった。このノートは黎明館に資料として保管されている。

西寮新入生は寮総務らの引率で、漱石が書いている「とんで行きたや、九州相良」の人吉への一泊旅行で球磨川下りをして頂いた。

8. 喫煙の始まり

光と陰を強調する映画の一齣、美女の指に挟んだシガレットから立ち上る煙、そしておもむろに美女の口から出てくる煙と絡まる動きのロマンチックなシーンが印象的だった。高校生になったから小生もと、タバコを購入した。早速火をつけ煙を吸った。とたんに頭がくらくらした。無理をして吸っている内にくらくらしなくなった。色々な名前の煙草があった。カメラは灰を落とそうと火がついている先を下にすると中身が滑り落ちてしまう。これはパイプ煙草の粉が詰められていて吸い口と火をつける先は紙で包まれている構造だった。

「花は霧島、煙草は国分」と言われているだけあってゴールデンバットの味は鹿児島と大阪では大いに違った。

| 1964年6月に医師の強力な指導で喫煙を止めた。医師が言うには投薬している薬は煙草を
| 吸えば効果が無くなり無駄な投薬となる。煙草を止めなければ投薬しないと。このように
| 言われると煙草を止めざるをえない。止めますと答え、以後煙草は吸っていない。その薬
| は現在も服用し続けている。

8. 飯野博一先輩、小石英夫先輩のこと

一年上の飯野博一先輩から岩波文庫の寺田寅彦著「史的に見たる科学的宇宙観の変遷」を幾人かで輪読する指導を受けた。また、図書館で「帝国大学新聞」を読むことを勧められた。いずれ進学する東大或は他の帝大の様子が分かるということであった。特に東工大の竹内時男さんが主張している人工ラジウムに理研の石井千尋さんが反論している記事を読むことを勧められた。

竹内時男さんは科学の啓蒙書を次々と書いておられるので知っていた。飯野先輩の話では学閥的争いだと。後年私が物理学を専攻して、此の記事を理解し論争当事者の先生方を知ることとなった。飯野先輩は阪大工学部ご卒業後「世界長ゴム」に入られた。悲しいのは阪神淡路大震災でお亡くなりになったとのこと。

寮生の有志は小石英夫先輩に俳句の手ほどきを受けた。

9. 鹿屋海軍航空隊の訓練飛行

入学後、授業が始まった七高の上空は、連日城山から錦江湾へ低空で飛ぶ飛行機の爆音で授業の先生の声が屢々掻き消された。魚雷攻撃の訓練だとのことだった。九月だったと思うが錦江湾は航空母艦、戦艦など多数の軍艦で埋め尽くされたが、数週後忽焉と消え、飛行訓練もパタリと無くなり静かな空になった。

10. 記念祭での劇と尹顯蓓先輩

十月、秋の**記念祭**で三寮それぞれの一年生が演じる劇の寮対抗があった。西寮の出し物は、詳しいことは忘れたが北国の蟹罐詰工場での物語。殆どの寮生が役を貰い演じた。一年上の**尹顯蓓**先輩が演出された。このような寮生による劇は、後年、早坂暁原作、山田洋次監督、中村橋之助、薬師丸ひろ子主演の松竹映画で旧制高校最後の年、昭和二十三年の松山高校での学生生活を描いた「**ダウンタウン・ヒーローズ**」でも寮生の劇があり、旧制高校の諸々の雰囲気判る。山口高校との対抗戦もあり、我々七高での生活を偲ばせる映画である。

尹先輩は我々有志を裁判の傍聴に連れて行って下さった。裁判は賭博博打で検挙された被告への認定尋問をする短時間の審理だった。裁判所を出てから「裁判の審理の殆どは次回の審理の日時を決めることだ」と解説して下さいました。

11. 九州四校対抗戦

どの競技か忘れたが、佐賀、福岡、五高の選手達が来鹿した。彼らが宿泊している宿へ三寮の寮生達が手分けして総務を先頭に押し掛け歓迎のストームをした。彼らは宿から出て来て返礼と称するストームをせねばならない。深夜近くまで幾度か押し掛けた。相手の選手の睡眠を妨害し体力を削ぐ行為である。多分、彼らの所へ行った場合は同じようなことで、こちらの選手の体力が削がれたことだろう。要するに高校生間の交流親善が目的の対抗戦。「**ダウンタウン・ヒーローズ**」では卓球試合のシーンがある。応援の連中が卓球台の横で大きな団扇で風を起し、ピンポン球のコースを乱している。このような真面目とも不真面目とも言える愉快なことをする高校生である。

12. 守永晃先輩のこと

守永晃先輩は東大天文に進学されるのだが、天文部の先輩として教えてもらうことが多くあった。

守永さんは北垣敏男君の先輩で、ご親戚の女性が紫原にある女子校の先生だったので度々守永さんに連れられて紫原へ行った。学校は白い建物で東郷青児の絵が多数掲げられてあった。学校の名前は失念した。或る夜、この女性宅に小生を入れて三人が招待されご馳走を戴き深夜まで歓談した。

13. 西寮生、寮総務らの引率で山川、長崎鼻への小旅行

昭和十六年十二月六日から西寮生全員が山川、長崎鼻への一泊旅行をした。七日長崎鼻へ着いた午後、上空を渡洋爆撃機の編隊が次から次と南方へ飛んで行くのが見えた。七日夜、寮に戻り八日朝は寝坊をしていると、誰かが「大変だ、大変だ」と叫んで寝ている者を叩き起こした。「重大発表がある」とのこと。**真珠湾攻撃**と**対米開戦**の大本営発表だった。

14. 学年短縮

昭和17年春、東条内閣は高校の正規三年履修を昭和十五年四月入学者から半年切り上げ九月卒業と決めた。我々十六年四月入学も二年半で卒業となる。更に昭和十八年四月入学の者は二年で卒業と短縮された。此の年、昭和十八年十月に東条内閣は在学徴集延期特例を廃止し、文系大学生らの所謂学徒出陣となる。

15. 土谷久雄先生から学んだこと

英語を直接教わったのではないが、何方かの授業の代わりに幾度か話をされた。ドイツナチスの行動を痛烈に批判された。ベルリンのオリンピック開催に際し、ナチスはギリシャのアテネからベルリンまでの聖火リレーなるものを導入した。土谷先生が言われるには、ナチス軍がいずれ攻め入ると計

画しているから、ナチスはその計画を伏せて、ただ聖火走者が走る道筋を調べる為だという口実で、ギリシャからアルバニア、ユーゴスラビア、ハンガリー、チェコスロバキアの地形を詳細に調べた。

ベルリン・オリンピックの記録映画「民族の祭典」、「美の祭典」やヒットラー・ユーゲントの行動などでナチスドイツは素晴らしいと感心している我々への先生から政治の真相を知るべしと云う警告であった。

先生が話されたことの一つに、ナチスが自らの重要な方針、方策から民衆の目を逸らすために、3S政策で民衆をスポイルしている、三つのSはスポーツ、スクリーン、セックスのSであると。

現在はこの3S政策は表立ってはいないが、スクリーンはテレビジョンであり、曾て大宅壮一さんがテレビの効果を「一億総白痴化」と称されていたことを思い出す。

大戦後、オリンピックを再開する時、聖火リレーはナチスの行為に対する反省から行わないと一度は決定されたが、結局は行うことになった。現在ではオリンピック開催国の宣伝になっているし、資本主義経済下の弱肉強食商業主義に振り回されている姿になっている。

16. 紙野伸二君、大村潤之助君と行った小旅行 漱石「草枕」の舞台となった「那古井」へ一年生終わりの春休みに文庫本片手に出かけた。

「おい」と声を掛けたが返事がない、の峠の茶屋越えの道は難路らしかったので、熊本の北の高瀬（現在は玉名市）から徒歩で南下した。十キロ以上の道程で、那古井らしき温泉宿に着き、「漱石草枕の那古井、志保田の場所か」と尋ねると「そうだ」と言う返事。その宿に泊まることにした。宿は一軒だけのようにだった。温泉とは名ばかりの風呂に入った。ロマンチストの大村君は湯に浸かりながら大きな声で「ふるさとの、小野の木立に、笛の音の、うるむ月夜や。」と歌い出した。「誰の歌か」と訊くと、「三木露風だ」と。彼は続けて「少女子は、熱きところに、そをば聞き、涙ながしき。十年経ぬ、おなじ心に、君泣くや、母となりても。」と歌った。

翌日、宿の隣にある漱石が泊ったと云う家へ行った。広い庭に面した横に長い建物で漱石が描写しているように立派だった。庭の向うにお寺が見えた。建物の部屋は外から眺めることができるように開けられていて、古い退色したセピア色の写真が置いてあった。それには和服を着て銀杏返しの髪で富士額いの女性が写っていた。多分その女性は「志保田」のお嬢さんなのだろう。

戦争が始まったと言うのに、まだのんびりしている時期だった。

| 大村潤之助君とは彼が没するまで親しく付き合った中である。小生が研究者となり初めて
| 東大での学会で研究発表する昭和二十二年春、彼の田園調布の家に宿泊させてもらった。
| 米の配給切符を持参する時代だった。その後、彼が文部省の宗務課長の時に度々訪れ色々
| と省内の事を聞いた。奥さんの姉の拭石さんが西宮で女子栄養学校を設立されるので文部
| 省を辞し学園の理事長となった。甲子園の西方の、久寿川辺と記憶しているが拭石さんの
| お家に居る大村君を訪ねて行き拭石さん自らの料理を戴いた。後年、学園理事への要請を
| 受けたが、名古屋からは遠いので辞退した。年度末の学園経理報告を名古屋市在住の彼の
| 友人計理士に依頼しているので、毎年此の時期に彼は名古屋にて一夜の会食をしてくれた。
| 後年、彼がこの計理士に電話をしている時に、彼の声の異常にこの計理士が気付き直ちに
| 別の回線で学園に知らされ、学園では直ちに医師が手当をしたが症状が重く回復せず命
| が消えた。

17. 山根銀五郎先生から学んだこと

音楽評論や解説で有名な山根銀二さんの弟さんが東大の生物学教室を出られたばかりの若さで赴

任されると聞き大いに興味を持って期待した。先生から生物学の講義は受けなかった。しかし、流石に音楽一家の方である。我々有志に呼びかけ、講堂で音楽について多くのことを課外活動で教わった。ある時は、ソプラノで歌う「野バラ」のレコードを10枚程持って来られ、次々と聞かせられた。我々の耳では何れも甲乙をつける程の差があるとは聞き取れなかった。最後に先生は一枚のレコードをかけた。このレコードの歌声は我々素人の耳でも、それまでの歌声とは格段の違いがあると言うより、此の人の声は輝いている、先に聞いたそれぞれの歌声は、その時はまずいとは聞こえなかったが、この声を聴いた後では全てぼやけた声に聞こえた。明らかな差が認識できた。先生は「この歌手はエリザベート・シューマンと言い、最高のソプラノ歌手です」と、そして「この人の右にでる歌手は多分出ないだろう」とおっしゃった。

- | 先生の話を書き留めていて、東芝 EMI TOCE-6084.85 X~91.1.23 C.1.24 「E.Schumann: シューベルト歌曲集」に1927年~1949年間の彼女がレコードした歌声がCDに再生、
- | 市販されたので購入した。このCDの解説に以下のことが記されている。
- | Elisabeth SCHUMANN: 1885年6月3日ザクセンのメルゼブルクで生まれる。
- | 1909年ハンブルク歌劇場デビュー、約10年間メンバー、指揮者で歌曲の伴奏者
- | カール・アルヴィンと結婚、1919年ウィーン国立歌劇場に招かれ23年間活躍、
- | 1938年ナチス侵入により、米国へ移住、カーティス音楽院で声楽指導、1952年4月23日死亡。

18. 大阪弁と薩摩弁

山岳部室で紙野君との会話は大阪弁だった。隣の部室に居た屋宮誠道君などが我々二人のやり取りを聞いていて言うには漫才を聞いているようだ。そして我々は話の相槌に良く出るのが「アホやなあ」、とか「アホかいな」という軽い言葉である。

屋宮誠道君などは「アホ」だけは言わないで欲しい、「鹿児島ではアホは最低を意味する表現だ、せめて馬鹿ならよい」と。言葉の受け取り方にこのような大きな差があるとは知らなんだ。

鹿児島の言葉を理解していなかったのだから次のようなことがあった。教練で小隊長の役をさせられて、運動場の両側で敵味方に別れて攻撃態勢に入った時、中村将軍が私に「敵はドシコ」と声がかかった。

「ドシコ」の意味を知る由もない。「何処かという意味でもなさそう、敵は向うに居るのが見えているから」だから返事ができなかった。中村将軍は「もたもたしたら敵にやられるぞ、隊長は失格」と。

「ドシコ」という鹿児島弁の意味をずーっと気にしていた。「どれほど、いくら、how many」ということだと判ったのは最近のことでした。

19. 薩摩の稚児組織

昭和17年の初夏、2年生総勢が吉野へ行き畠の開墾とサツマイモの植え付けをした。晴天で春蟬の鳴き声が凄かった。大阪でこのような春蟬の大合唱を聞いたことが無かった。徒歩での帰り道で前田静信君が「大阪にも稚児というのがありますか」と尋ねられた。薩摩については殆ど予備知識を持っていなかったし、普通稚児と言うと神社の祭りなどで幼い子供に祭礼の着物を着せ厚化粧をして祭礼行列に参加する稚児のことしか知識が無かった。この祭礼の稚児行列のことを答えた。前田君は前田君で、こちらの方の稚児行列のことは知らなかった。結局会話は噛み合ずに終わった。

- | 後年調べた。薩摩の郷中教育の一つで、男児七才 - 十才を小稚児コチゴ、十一才 - 十五才
- | を長稚児オセチゴ、青年を二オニセと称したとある。

20. 山岳部での訓練

運動場の城山側は石垣だった。部長の佐藤先輩は石垣を登り、走って城山の頂上へ行くことを日課として命じられた。最初は石垣登りは簡単ではなかった。素足で登るのだが、良い突起の場所は下からの指示を聞かねばならなかった。城山登山道を走って行くのも初めは非常に辛かった。二、三週程後には石垣登りも登山道を走って行くのも段々と楽になって来た。この訓練により長距離走が楽になりかなり早く走れるようになった。

21. 桜島の噴火

昭和十六年の秋、正確なことは忘れたが桜島南岳東側の中腹で突如噴火した。夜のことである。天文館辺に出ていた友人が寮に帰って来て言うには、目にゴミが入ったような痛みを感じた、寮に帰って帽子や肩に細かいゴミのようなざらざらとしたものが着いているのに気が付いたと。翌朝、桜島が噴火したと知らされた。以後度々噴煙を上げるのが望見できた。

鉱物の**阿多実雄**先生が山岳部の者を連れて視察に行かれた。山岳部の者が帰って来て言うには、丁度火口近くまで行こうとした時、小噴火が起った。一見弱そうな阿多先生が真っ先に一番速く遠くまで走って逃げられたと。

噴火後の或る日曜日、**江夏弘**先輩が紙野君と小生を連れて南岳の西側を登った。頂上付近の地肌は熱く所々に熱水蒸気が吹き出していた。

山岳部の十人程が高隈山へ土曜日から一泊野営の登山をした。野営の焚き火を囲んで雑談をしている時、桜島が小噴火を度々起こすのを望見した。赤い玉（溶岩と思われる）が幾つか転がり落ちるのが見えて、暫くすると遠雷のようなゴロゴロという音が聞こえて来た。小噴火でも爆発音を発しているようである。貴重な体験だった。

22. 広島駅で下車し駅前の店で牡蠣を購入

昭和十六年冬、帰省する際、列車が広島駅に停まった。朝がまだ明けやらぬ三時頃、急に思い立って牡蠣を買って帰ろうと下車して駅を出た。駅前に何軒か裸電球の元で水を流しながらの寒い土間で女性が牡蠣の殻を剥いている店があった。春に神戸の伯母に世話を掛けたから伯母と自宅とに牡蠣を持って帰ろうと思った。値段は忘れたが、十センチくらいの青竹、長さ二十数センチの筒に牡蠣を入れてくれた。蓋と下げ紐が付いていた。三本買った。

23. 乗鞍岳登攀

昭和十五年秋に山岳部が剛健旅行班となる。山岳部は例年夏休みには屋久島へ行き宮之浦岳、永田岳、大障子岳等に登攀する慣しだったが、昭和十七年の夏、関西出身の部員は中部のアルプスへ行きたいと申し出て許された。紙野伸二、小生に一年生の大東弘、川道敏男、秋田一平の三君、五人が乗鞍岳へ行くことに決定した。一週間分のお米を貰い、テントを借りて、最終の打ち合わせを京都ですることとして、帰郷した。食糧等を購入し、各自のリュックの重さは約七貫目、二十キロを超えていた。この登攀の記録は部の機関誌「南冥」第四号、昭和十七年に掲載されている（ガリ版刷りのB版七十五頁、藤田久邇男君が表紙とカットを担当した）。此の号には山地健吉、藤田久邇男、紙谷良夫、吉井徹、高井敏治、紙野伸二、山田正興、蒲田利和、新保友之、ほかの諸氏が登攀記、創作、自己の活動など色々と寄稿している。

| 後年、研究者となり宇宙線研究に従事するその初期、大阪市立大学理工学部で高山に宇宙
| 線観測所を設置する計画のとき、この乗鞍岳登攀の際、見た建築中の建物や道路建設を思
| い出し渡瀬先生に伝え、観測所が設置されることとなる。

乗鞍岳への道路について聞いたことがある。戦後、国が濃飛バス会社の専用路線としてよ
いと伝えた時、社長さんは「戦時中、土地の者が陸軍の命令により無報酬で働いてつくっ
た道路で、私できる道路ではない」と辞退されたそうである。よって国道となった。社長
さんにはこの行為により勲章が授与された。

24. 座敷雪隠のある下宿

昭和十七年の夏期休暇後、鹿児島に戻り下宿を探すこととなったが、当てがないので山岳部で話していたら紙野君が自分の下宿へ来ても良いとのことで、そこへ潜り込んだ。場所ははっきりとは覚えていないが、南州墓地へ行く坂の途中を右へ入った所のようなものである。部屋は広い二間続きで縁側があり庭に面していた。驚いたのは雪隠が五、六畳の畳敷きで、違い棚があり掛け軸が掛けられ花が生けてあった。高さ三尺程（約1メートル）の枕屏風のような屏風で囲われているだけ。昔の殿様御殿のようである。用足しをしている間、落ち着かない気分だった。

更にもう一つ困ったことが起った。この下宿の主人は若夫婦だった。そして、或る日、早く帰った時、女主人は夕食前に風呂に入れと勧めたのでそうした。体を洗おうとした時、彼女が突然入って来て背中を洗うからと。彼女は着物を着たままだが、これが薩摩の女性が男子に対する奉仕的行為かどうか知らないが大いに戸惑った。長く此処には居らぬ方が良さそうと思った。予告もせずに紙野君は出て行った。小生も出ようと思ひ山岳部室で下宿を探していると話したら、紙谷君が「僕の部屋の隣が空いているから頼んでみる」と親切に言ってくれた。引き受けて貰えると言う返事で引っ越した。

市電の荒田八幡停留所から西へ歩いて数分の所で、家主さんは小生の親位の年齢の日高さんご夫婦だった。蒲団袋、柳行李、机などを「メッセンジャー」のリアカーで運んでもらった。当時、市内の方々に「メッセンジャー」の看板があり、電柱にも広告が貼付けられていた。日高さんの家は普通の日本家屋で昼の弁当も作って下さると言う良い条件だった。日高さんは喜入がお里だとのこと。紙谷君と卒業まで過ごした。

昭和十七年十一月に国鉄の関門トンネルが開通し、その記念で昭和十八年春に大阪から鹿児島への団体観光旅行が計画され母達が来た。岩崎谷荘に宿泊している母を日高さんの家へ連れて行き紹介したが、大阪弁と鹿児島弁では意思疎通は無理だった。母は日高さんが言われたことは全然判らなかつたと言った。

25. 下瀬育郎先生のこと

昭和17年秋に各高校にグライダー（プライマリー級）が持ち込まれ初期の訓練を受けることとなった。下瀬先生が訓練指導を担当された。山岳部部員が動員された。狭い運動場なので本格的な飛行訓練はできないが、部員は順番に操縦とゴムロープを引く訓練を受けた。基本の訓練も何もない状態だったから、グライダーの操縦に無理があり翼を支えているワイヤーが切れた。予備のターンバックルがないので飛行訓練は中止となった。正月休みの前だったから、先生は小生に、大阪の梅田新道にグライダーの部品を扱っている店があるので、ターンバックルを幾つか購入してくるよう依頼された。先生に部品をお渡ししてからのグライダーがどのようなになったかの記憶はない。

小生が阪大の物理を受験するとお伝えすると、下瀬先生は物理学教室の教授先生の1人1人のお名前を挙げ、此の教授の研究室は良い、此の教授の研究室だけは入るな、などと詳しい情報を話された。

後年、先生が山口大学へ転出された後も先生とは色々なことで交流が続き教えを受けることが多々あった。

26. 鹿屋海軍航空隊の勧誘と分隊長士官の言葉

昭和十八年の五月頃だったと思う。士官への勧誘と見学を兼ねて鹿屋海軍航空隊は二泊三日の体験入隊を募集した。五、六十名が参加した。十名程の分隊に分かれ分隊毎に大学卒か中退で士官になった少尉か中尉さんが分隊長として世話をした。小生の分隊担当の士官は東京の私大卒だった。ハンモックの効用とつり方などの説明は冗談まじりだった。ハワイを魚雷攻撃した機と同種の機に搭乗した。機は三人乗り、前は操縦士、中央は魚雷照準士、後が通信士で、中央の席に乗せてもらった。三機編隊の右側の機だった。機の中を見て驚いた。照準装置を外したドライバーが転がっているし、何だかごちゃごちゃしている。きっちりと整頓されたとはとても思えない状態だった。照準士が小生の横に入り肩から上が風防から出た状態で飛行した。空気の流れが激しいから小生が質問をした声が自分には聞こえなかったが、彼には聞こえていたらしい。三機編隊の位置をきちんと決めるのは先頭の隊長機の翼に斜めの筋が描いてあり、左右の機の操縦士はその筋の方向に自分の機の位置を取れば良いことになる。操縦士は前方を見ないで横ばかりを向いて機の位置を維持していた。気圧の変化でこちらの機が急上昇した。瞬間に隊長機から警告とおぼしきブザーが激しく鳴り位置の修正を命令された。七高の上を通り桜島方向へ向かい低空飛行から急上昇した。照準士は体に 2g の圧がかかっていると説明してくれた。そして、編隊は急旋回をした。その時の体への圧は 3g だと説明してくれた。行事が全て終わり解散となった時、小生の分隊の世話をしてくれた士官が静かな声で言うには「ここは君たちが来るような所ではない、つまらない所だ、勧誘にのって軍隊には来るべきではない」と。

27. 教練査閲の講評が「丁」

昭和十八年六月の教練査閲では熊本の司令部から金ぴかの少将が来た。安河内配属将校の元で伊敷の練兵場での演技が無事終わり七高運動場へ戻り、しばしの休憩が伝えられた。我々は雑然と立ちん坊で雑談をしながら休んでいた。金ぴか少将が出て来て壇上に立った。「集合」と彼が叫んだ。駆け足で集まり整列すべきところ、我々は鉄砲を担ぎ、ぞろぞろと歩いて壇上の彼を取り巻くように集まった。その瞬間、壇上の金ぴか少将は顔を真っ赤にし、「講評 丁」と叫んで壇から飛び降り建物に入ってしまった。我々は誰とも諮らず全員がこのような行為をした。

「丁」は落第である。厳しい罰が来るのではと心配したが、学生にも安河内配属将校にも館長にも罰はなかった。厳しい塹物の陸軍も高校へは何か特別の配慮をしたのではと想像した。

28. 映画はよく見た

記憶している幾つかを示そう。

☆ 会議は踊る **Der Kongress tanz** '34 独

リリアン・ハーヴェイ Lilian Harvey が歌った 'Das gibt's nur einmal'の歌詞は覚え易いメロデーと共に独逸語を習い初めた我々には易しく寮ではよく口ずさんだ。山本敏男君は特に此の歌が好きなので大きな声で歌っていた。先に書いた日本の映画「ダウタウン・ヒーローズ」で学生が歩きながら歌う「ムシデン、ムシデン・・・」(muß i denn, muß i denn, ...)を我々はよく歌っていたのを思い出す。

☆ ブルグ劇場 **Burg Theater** '39 奥

ウイーンの此の劇場で演ずることができる俳優は最高の地位だと言われている古典劇の殿堂。老主人公が劇中劇で演ずるファウストと少女との結ばれぬ物語と重なる清楚な若い俳優に夢中になるが、彼女に愛人がいることを知り、鏡に映る自分に嘲罵の言葉を吐きかけると言うストーリー。この劇場で俳優が使うドイツ語が正統だと言われている、我々はドイツ語の勉強を兼ねて主人公のミッテラー

を演じるウエルナー・クラウス Werner Kraus の独逸語に耳を澄まして聞き取ろうとしていた。

☆ **未成交響曲 Leise flehen meine Lieder** '35 奥

麦畑を彷徨い道端のマリア像に祈るシューベルトの姿、最後のシーン、は印象に残っている。

☆ **制服の処女 Mädchen in Uniform** '33 独

厳格な女学校寄宿舎の生徒と優しい先生との話 先生を演じたドロテア・ウイーク Dorothea Wieck はその端麗な美しさで大人気をよんだ。

☆ **プラークの大学生 Der Student von Prag** '35 独

ドロテア・ウイーク Dorothea Wieck が学生が屯している酒場にモナリザのような顔付きで天女の如く現れる。このシーンは我々寮生の酒宴のようで彼らに親近感を持ったが、我々にはないのが彼女のような女性の存在だった。

☆ **民族の祭典 Fest der Völker-Olympia Teil-I**

☆ **美の祭典 Fest der Schönheit-Olympia Teil-II**

'40 独 1936年のベルリン・オリンピックの記録映画

ヒットラー・ドイツの栄光に感激してこの映画を見ていた。

☆ **望郷 Pépé-le-Moko** '37 仏

アルジェのカスパ ジャン・ギャバン Jean Gabin と ミレーユ・バラン Mireille Balin 渡辺純先生ご推奨の映画 最後のシーンはいつまでも記憶に残っている。

☆ **次郎物語** 日本の映画、下村湖人原作で女性の涙を誘っていた。

29. 読書

寮生活で始まる高校生の行為の最大の特徴は読書である。乱読だった。小説、哲学書、科学啓蒙書。徹夜で読むことが多かった。一冊を読み終える時間は早かった。この習慣は今でも続いている。研究職の道を選んだ後も専門外の書籍を読む習慣は変わっていない。

30. あとがき

我々は明治、大正、昭和初期と経過してきた波瀾万丈、世界が激変する時代の後期の渦中で育った。旧制高校は帝国大学への予備校的教育機関で、将来国の中枢での活躍を期待されている集団でもあったし、そのように教育されて来た。

長い人生の中の、元々3年であるのが2年半となったが、この短い期間に注入された行動基盤、思考構造は、我々以降に育った人達とは大いに違うものがあると信じている。その2年半に行動した一端を紹介した。

敗戦後は過去に得た行動基盤と思考構造に新しく示された知識を加えて新しい思考と行動への指針を作ることができたと自負している。

2010.3.3. 完